

# ベルギーのドイツ語共同体

— 国境を越えたドイツ語圏の広がりへの把握に向けて —

黒子 葉子

## 1. はじめに

2015年度より「ドイツ語圏の言語」という講義科目を担当し、今年で3年目になる。受講者はドイツ語の基礎文法を一通り勉強した2年生が中心となっている。そのような学生にとってなるべくわかりやすい形でドイツ語の特徴を提示し、一緒に考えてもらうことを目指しているが、毎週の講義準備の際には悩みが尽きない。春学期の講義を始めるにあたって、まずはドイツ語圏の定義と広がりについて話すことにしている。ヨーロッパにおいて国境線と言語の分布が必ずしも一致せず、ドイツ語がドイツ、オーストリア、スイス、リヒテンシュタインのみならずルクセンブルクやベルギーでも公用語とされていることは、日本で生まれ育った学生にとって新鮮に映るようだ。

さて、ドイツの隣国であるベルギーの言語事情は複雑である。オランダ語とフランス語の二大言語と並んで、ベルギーの総人口の1%にも満たないドイツ語母語話者のために、ドイツ語共同体 (Deutschsprachige Gemeinschaft<sup>1)</sup>) という独自の言語共同体が設立されていることに、講義内では言及するようにしているものの、そのような政治体制が成立した背景について、私自身の理解が追い付いていないとはとても言えなかった。また、かつて留学していたケルンからそう遠くないところに位置しているにもかかわらず、ドイツ語共同体の領域

---

1) 本稿では、必要に応じて、Deutschsprachige Gemeinschaft を DG と略記する。

であるベルギーのドイツ国境地帯を訪れたことはなかった。さらに、ドイツ語共同体で話されているドイツ語方言の大半が西中部ドイツ語 (Westmitteldeutsch) のリプアーリ語 (Ripuarisch) とモーゼルフランケン語 (Moselfränkisch) に属するという事実にも興味を引かれた。つまり、第二次子音推移の波及が扇状の拡散を示すライン扇状地域 (Rheinischer Fächer) の西端にドイツ語共同体は位置しているのである。

もうひとつ、この地域に関心を持つきっかけとなったのは、シュテファン・ツヴァイクの自伝 *Die Welt von Gestern* を他大学の授業で扱ったことである。この著作のうち 1914 年夏の第一次世界大戦開戦期の緊迫した状況が描写されている章において、ベルギー国境を越えた最初のドイツ側の停車駅としてヘルベスタール (Herbesthal) という駅が登場する<sup>2)</sup>。この聞きなれない駅名を調べるうちに、この駅がもはや存在しないことを知ると同時に、現在のドイツ語共同体にあたる地域が 1920 年にドイツ領からベルギー領となったことを知った<sup>3)</sup>。このような国境線変更の歴史は、今日の言語状況にどのように影響しているのだろうか。

以上のような経緯から、ベルギーのドイツ語共同体の設立の背景と今日のあり方について調査するため、2017 年 8 月に共同体の首府オイペン (Eupen) を訪問した。本稿では、そのさしあたっての成果をまとめておきたい。2 節では、現在のベルギーの地方行政区分と、言語共同体の担う役割について述べる。3 節では、ベルギーにおけるオランダ語系住民とフランス語系住民の言語対立、いわゆる「言語戦争」の歴史を振り返る。その後 4 節では、ベルギーのドイツ語共同体に注目し、設立の経緯や現在の構成について説明する。最後に 5 節では、ドイツ語共同体の言語状況を論じ、共同体内の方言の分布、メディア、教育制度を取り上げる。これにより、国境を越えたドイツ語圏の広がりについて理解を深めることを目指したい。

---

2) Zweig (2016<sup>42</sup>: 254) 参照。

3) ヘルベスタールは、現在、ドイツ語共同体ロンツェン自治体の西端に位置する。

## 2. ベルギーの地方行政区分

ベルギー王国、通称ベルギーは、現行憲法第1条に規定されているように<sup>4)</sup>、3つの地域 (Region) と3つの共同体 (Gemeinschaft) の2層、計6つの地方行政区分から構成される連邦制国家である。3つの地域とは、北部のフランドレン地域 (Flämische Region)、南部のワロン地域 (Wallonische Region)、およびブリュッセル首都圏地域 (Region Brüssel-Hauptstadt) である。3つの共同体とは、オランダ語共同体 (Flämische Gemeinschaft)、フランス語共同体 (Französische Gemeinschaft)、ドイツ語共同体 (Deutschsprachige Gemeinschaft) である。



図1 ベルギーの各地域と共同体<sup>5)</sup>

図1からわかるように、地域と共同体は地理的に大きく重なり合っている。

4) „Belgien ist ein Föderalstaat, der sich aus den Gemeinschaften und den Regionen zusammensetzt.“ (Artikel 1 der Verfassung Belgiens)

5) Das Bürgerinformationsportal der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens „Das belgische Staatsgefüge“ [http://www.ostbelgienlive.be/desktopdefault.aspx/tabid-97/205\\_read-918](http://www.ostbelgienlive.be/desktopdefault.aspx/tabid-97/205_read-918) (最終閲覧日 2017年8月22日) より引用。

すなわち、フランデレン地域はオランダ語共同体と一致しており、オランダ語<sup>6)</sup>が公用語とされている。ワロン地域の大部分はフランス語共同体であり、そこではフランス語が公用語とされているが、東部のドイツ国境地域にあたるドイツ語共同体の領域では、ドイツ語が公用語とされている。ブリュッセル首都圏地域<sup>7)</sup>では、オランダ語とフランス語の二言語が併用されている。これらの組織はそれぞれ議会と政府を持ち<sup>8)</sup>、権限分野において独自の政策を展開している。つまり、ベルギー連邦政府の権限は外交、国防、財政、社会保障、司法等に限定されており、地域政府は経済、雇用、公共事業、都市開発、環境等を、共同体政府は言語、文化、教育、厚生等を管轄している。

### 3. ベルギーの言語問題と連邦制国家への移行

ベルギーにおいて上述の複雑な地方行政区分が成立した背景には、オランダ語系住民とフランス語系住民の積年の言語対立がある。本節では、19世紀以降のこの地域の歴史を概観するが、詳細についてはすでに多くの文献が存在するため<sup>9)</sup>、要点のみのまとめとしたい。

#### 3.1. ネーデルラント連合王国からの独立

ナポレオン戦争終結後、ウィーン会議においてフランスに対抗しうる緩衝国の設立が目指され、その結果、1815年にネーデルラント連合王国が成立した。この国は、16世紀以来分裂していた南北ネーデルラント（ベルギーとオランダ）を統合したものであった。国王ウィレム1世は強大な中央集権国家を建設

---

6) フランデレン地域のオランダ語話者は、自らの言語をフラマン語 (Flämisch) と呼ぶ。

7) ブリュッセル首都圏地域では、オランダ語共同体とフランス語共同体の双方に自治権が与えられている。

8) ただし、フランデレン地域とオランダ語共同体は領域が一致することから、議会と政府が事実上統合されている。

9) 詳細は、河崎 / クレインス (2002)、小川 (2009)、松尾 (2015) 等を参照のこと。

すべく、官僚と教育の両面において積極的なオランダ語政策に乗り出した。しかし、この試みには困難が伴った。ひとつ目に、国内の宗教上の相違が挙げられる。北部のオランダは大部分がプロテスタントであったのに対し、南部のベルギーはカトリックであった。ふたつ目に、思想上の違いが挙げられる。ウィレム1世は啓蒙専制君主として市民の自由を制限しようとしたが、南部の大ブルジョワジーはフランス革命の自由の理念に感銘を受けていた。カトリック主義と自由主義が結びついた結果、ワロンの住民やフランス語の素養があるフランデレンの上流階級はオランダ語政策に激しく抵抗した。1830年、フランス七月革命の余波を受けブリュッセルで暴動が起きると、ベルギー独立革命へと発展し、同年、ベルギー王国の独立が宣言された<sup>10)</sup>。

### 3.2. ベルギー王国のフランス語政策と言語戦争

オランダ語政策に対するエリート層の反発から成立したベルギー王国では、一転してフランス語系住民に都合の良い取り決めがなされた。国内の文化的統合を促進するために、フランス語が唯一の公用語とされ、官職を得るためにはフランス語の習得が必須とされた。首都ブリュッセルには議会と政府が置かれ、中央政権による強力な統治が行われた。州や市町村などの地方機関にもいくつもの権限が委託されたが、あくまで下級機関としての位置づけであった。初等教育に関しては、地方にある程度の自治権が与えられたが、中等・高等教育における使用言語はフランス語のみであった。中世以来毛織物業で栄華を誇ったフランデレンは、産業革命によってワロンに石炭産業や鉄鋼業の重工業地帯が生まれると、経済的にも遅れをとることになった。

このように政治的にも経済的にも二次的な立場に置かれたフランデレンの住民は、フランス語政策に対して次第に不満を強めていき、「言語戦争」と呼ばれる言語問題が深刻化した。19世紀後半以降、参政権の対象が拡大すると、ベルギーの人口の過半数を占めるオランダ語系住民の政治力が強まり、その結

---

10) ただし、オランダによる正式なベルギー独立の承認は1839年になってからであった。

果、いくつかの言語法が制定された。1883年までに、司法、行政、中等教育の分野において、フランデレンでのオランダ語の使用が認められた。1898年に「オランダ語で書かれた法はフランス語で書かれた法と同等の効力を有する」という言語平等法が制定されると、フランス語系住民は自身の有利な立場を脅かされると考え、これに反発した。

20世紀に入ると、両者の言語的対立はさらに激化した。第二次世界大戦後、エネルギー資源の主体が石油へ転換すると、ワロンの重工業は衰退し、安い労働力に溢れるフランデレンが新しい投資先として好まれ<sup>11)</sup>、発展を遂げていった。つまり、北部と南部の経済的優位性が逆転したのである。経済的に停滞したワロンは、地域経済の基盤となる政策を自ら策定することを求めた。また、経済的成長を自信として、フランデレンは言語と文化における平等を求め、1962-63年にはベルギーにおけるオランダ語とフランス語の言語境界線を法的に確定するに至った。

### 3.3. ベルギーの国家改革

ワロンとフランデレンの要求（地域経済の自立および言語・文化の平等）を満たすために、1968年から2014年の間に計6回の国家改革が行われ<sup>12)</sup>、単一国家ベルギーは次第にその姿を変えていった。まず、1968-71年の第1回国家改革で、4つの言語圏の区分が憲法に明記され<sup>13)</sup>、3つの地域 (Region) および3つの文化共同体 (Kulturgemeinschaft) が作られた。文化共同体には、文化的事案に限定した審議会 (Rat) が置かれた<sup>14)</sup>。その後、1980-83年の第2回国家改革

---

11) フランデレンにはアントウェルペン港、ヘント港、ゼーブルッヘ港などの主要な港湾があり、インフラストラクチャーにも恵まれていた。

12) 一連の国家改革については、Parlament der Deutschsprachigen Gemeinschaft (2016a: 13-17) を参照。

13) 4つの言語圏とは、オランダ語圏、フランス語圏、ドイツ語圏、オランダ語とフランス語の二言語併用圏 (ブリュッセル) である。

14) 2004年7月9日に憲法改正により各地域・共同体の審議会 (Rat) は議会 (Parlament) へと名称が変更された。

で、文化共同体は共同体 (Gemeinschaft) となり、権限分野が拡大された<sup>15)</sup>。同時に、審議会によって選出された執行機関 (Exekutive)、すなわち政府 (Regierung) が設置されることになった。一連の改革のうちで特に重要であったのは、1993-94年の第4回国家改革であり、憲法第1条の改正によってベルギーは正式に連邦制国家へと転換した。これに伴い、それぞれの地域と共同体の自治権が保証されたわけである。

## 4. ベルギーのドイツ語共同体

前節で見たように、ベルギーの歴史はすなわち、オランダ語系住民とフランス語系住民の言語対立と共生の努力の歴史であると言えるだろう。そのなかで、7万6千人ほどの人口しか持たないドイツ語共同体も、オランダ語共同体 (人口約600万人) やフランス語共同体 (人口約420万人) と同等の連邦構成体として認められていることは注目に値する。本節では、この小さな言語共同体の特徴とこれまでの歩みについて述べる。

### 4.1. ドイツ語共同体の構成

ドイツ語共同体は、ベルギー南部ワロン地域の東端、リエージュ州 (Provinz Lüttich) のドイツ国境地帯 853.6km<sup>2</sup> に広がっている。ドイツ語共同体の議会と政府が置かれているのは、北部の中心都市オイペンである。人口は76,273人 (2014年) で、ベルギーの総人口の約0.7%に相当する。ドイツ語共同体の住民の国籍は、ベルギー国籍が約8割、外国籍が約2割となっている。外国籍のうち最も多いのはドイツであり (11,377人)、オランダ (759人)、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ (301人)、ロシア (252人)、ルクセンブルク (195人)、ポーランド (194人) と続く (2012年)<sup>16)</sup>。

---

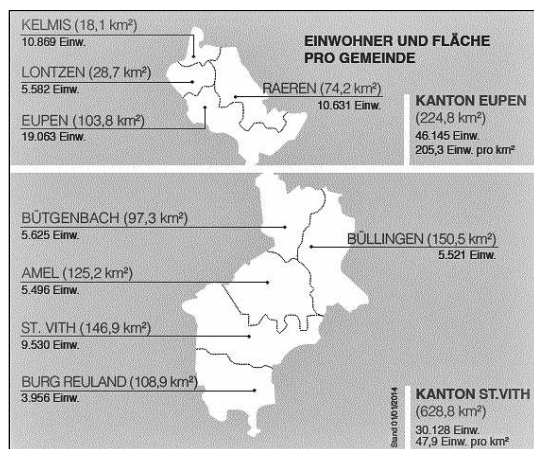
15) この改正により、共同体は個人に関連する事案や共同体間および国家間の事案も取り扱うことが可能となった。

16) Rat für Entwicklungszusammenarbeit, Solidarität und Integration (2014: 45) 参照。

公用語	ドイツ語	人 口	76,273 人 (2014 年 1 月 1 日付)
首 府	オイペン	人口密度	89.4 人 /km <sup>2</sup>
設 立	1984 年 1 月 30 日	国 籍	ベルギー国籍 : 60,999 人
面 積	853.6 km <sup>2</sup>		外国籍 : 15,274 人

表 1 ドイツ語共同体の基本データ (2014 年)<sup>17)</sup>

ドイツ語共同体は、北部（ケルミス、ロンツェン、オイペン、ラーレン）と南部（ビュトゲンバッハ、アメル、ザンクト・フィート、ブルク・ロイラント、ビュリンゲン）の計 9 つの自治体 (Gemeinde) によって構成されている。北部のオイペン郡 (Kanton Eupen) と南部のザンクト・フィート郡 (Kanton St.Vith) は、アイフェル山地のホーエス・フェン (Hohes Venn) という高層湿原によって隔てられており<sup>18)</sup>、特色が大きく異なる<sup>19)</sup>。

図 2 ドイツ語共同体の各自治体の人口と面積 (2014 年)<sup>20)</sup>

17) 統計データは DGStat, Ministerium der DG (2014) に依拠。

18) ホーエス・フェンは、フランス語でオート・ファーニュ (Hautes Fagnes) とも呼ばれる。その一部はフランス語共同体のヴァイスメス (*dt.* Weismes / *fr.* Waimes) にも広がっている。標高 694m のポトランジュ (Botrange) はベルギーで最も高い山である。

19) Parlament der Deutschsprachigen Gemeinschaft (2016a: 7-9) 参照。

20) DGStat, Ministerium der DG (2014) より引用。



北部はアイフェル山地に接する地域で、交通網が発達した都市部が存在し、共同体内の人口が集中している<sup>21)</sup>。オイペンは18世紀に織物業で栄えた街であり、現在でも産業の中心地である。ドイツ語共同体独自の放送局BRF (Belgisches Rundfunk- und Fernsehzentrum der DG) もこの街に所在する。オイペン以外の北部自治体は大部分が田園地帯であるが、ケルミスには菱亜鉛鉱の鉱山があり、何世紀にも渡って採掘が行われていた。19世紀にはヨーロッパで最も重要な採掘地帯でもあった。

一方の南部は、アイフェル山地の森林や牧草地が広がる自然豊かな高原地帯である。伝統的には農業が営まれているが、近年はとりわけ観光業に力が入られている。南部で教育機関や商店が集中しているのはザンクト・フィートである。ビュトゲンバッハでは、近年保養地として観光客を取り込み、地域を活性化させようとする試みがなされている。

#### 4.2. 東ベルギー地方の国境の変遷

3節でベルギーが1815年のウィーン議定書によってネーデルラント連合王国の一部となり、その後1830年に独立したことを見たが、ドイツ語共同体が属する東ベルギー地方 (Ostbelgien) には、異なる歴史的背景が存在する<sup>22)</sup>。

まず注意しておきたいのは、東ベルギー地方、別名オストカントネ地方 (Ostkantone) には、現在のドイツ語共同体の領域であるオイペン郡とザンクト・フィート郡だけでなく、フランス語共同体の一部であるマルメディ郡 (Kanton Malmedy) も含まれるということである。マルメディ郡には、マルメディとヴァイスメスの2自治体が属している (図3参照)。

1794年以前のいわゆるアンシャン・レジームの時代、現ドイツ語共同体の領域はおよそ北部がリンブルフ公領、南部がルクセンブルク公領であった。そして、北部でも南部でも、ドイツ語の方言が話されていた。1794-95年、オー

---

21) 北部のオイペン郡は、共同体全体の26%ほどの面積しか占めないが、約60%の住民がこの地域に住んでいる。

22) Parlament der Deutschsprachigen Gemeinschaft (2014) および (2016a) 参照。

ストリアの支配下にあった南ネーデルラント（リンブルフ公国、ルクセンブルク公国を含む）がフランス革命政権に占領されると、東ベルギー地方はフランスのウルト県（Ourthedepartment）に組み込まれた。ナポレオン戦争後の1815年、ウィーン会議にてラインラントのプロイセンへの帰属が決まり、東ベルギー地方もプロイセンの支配下に入った<sup>23)</sup>。また、この時、現在のマルメディ郡もプロイセンへ割譲された。こうして、1920年までの100余年、東ベルギー地方はアーヘン行政区域（Regierungsbezirk Aachen）の一部となった。

1914年8月に第一次世界大戦が勃発すると、ドイツ軍はベルギーへ侵攻した。東ベルギー地方の人々もドイツ兵として戦闘に加わり、合計1,848人の死者・行方不明者を出した<sup>24)</sup>。大戦終結後の1919年、東ベルギー地方はベルギー政府の行政下に置かれ、バルティア将軍の暫定政権（オイベン＝



図3 東ベルギー地方

出典：<https://de.wikipedia.org/wiki/Ostbelgien>

23) アーヘンの南西に位置していたモレネ (Moresnet) は、1816年のアーヘン協定によって3分割された。そのうち、当時大変貴重であった菱亜鉛鉱の鉱山を含む中部のケルミスの丘周辺 3.5 km<sup>2</sup> は、プロイセンとオランダ（1830年以降はベルギー）の共同統治領とされ、中立モレネ (Neutral-Moresnet) という極めて小さな国家として約100年間存続した。第一次世界大戦後、ヴェルサイユ講和条約により中立モレネはベルギー領となり、名称がケルミスに変更された。

24) Parlament der Deutschsprachigen Gemeinschaft (2016a: 11) 参照。

マルメディ政府)に支配された。民族自決の原則に沿い、1920年、オイペンとマルメディで帰属を問う住民投票が行われるものの、それは住民にとって公正とは言えない方式のものであった。投票結果を受け、5年の移行期間の後、1925年に東ベルギー地方はベルギーに正式に編入された<sup>25)</sup>。

それから15年後の1940年5月10日、第二次世界大戦においてベルギーは再びドイツ軍の侵攻を受け、同年5月18日、オイペン＝マルメディ地域はドイツに併合された。この地域からは、約8,700人の住民がドイツ軍に徴兵され、そのうち約3,200人が犠牲となったという<sup>26)</sup>。1944年12月には、アルデンヌの戦いにおいてザンクト・フィートとアイフェルの村々が徹底的に破壊された。1944-45年、連合国による解放の後、東ベルギー地方は再びベルギーに帰属することになる。

このように、ドイツ語共同体の所在する東ベルギー地方は、フランス革命期以降、フランス、ドイツ、ベルギー、ドイツ、ベルギーの支配下に置かれ、度重なる国境線の変更を余儀なくされてきた。ラテンとゲルマンの文化が交錯するヨーロッパの中央部で、大国の利害に翻弄されながら、複雑な歴史を経てきたわけである。

#### 4.3. ドイツ語共同体の設立

第二次世界大戦後も、東ベルギー地方にはすぐに平穏が訪れたわけではな

---

25) 1925-26年には、2億金マルクと引き換えにオイペン＝マルメディ地域をドイツへ返還する交渉がベルギーとドイツの間で密かに進められたが、フランスが激しい抵抗を示し、失敗に終わっている。

26) Parlament der Deutschsprachigen Gemeinschaft (2016a: 12) 参照。ちなみに、オイペンのドイツ語共同体議会には、共同体に関する様々な展示があり、そのひとつに Josef Theissen という兵士の紹介がある。彼は1914年7月にザンクト・フィート近郊でドイツ人として生まれ、第一次大戦後にベルギー国籍となる。後にベルギーの軍人となるが、1940年にオイペン＝マルメディ地域がドイツに併合されると、ドイツの軍人として戦地に赴かざるを得なくなり、二度と故郷に戻ることはなかった。彼は1944年10月以降セルビアで消息不明となり、そこで命を落としたと言われている。これについては、Parlament der Deutschsprachigen Gemeinschaft (2014: 9) にも記述がある。

かった。戦争中にナチ政権に協力した（と疑われる）者に対しベルギー政府は肅清を行ったが、東ベルギーの住民はその行動を厳しく、不当なものと感じていた。それは、ベルギー政府がこの地方のドイツ併合を看過し、戦後も国境地帯の特殊な状況に対して理解をほとんど示さなかったためである<sup>27)</sup>。戦争被害をめぐる諸問題の解決には長い年月を要した。なかでも、ドイツ軍に徴兵された東ベルギー人の問題（Zwangssoldaten-Frage）は、1989年になるまで最終的な解決に至らなかった。

ベルギーとドイツの関係改善の動きは1956年に始まる。同年9月、ベルギーとドイツ連邦共和国（西ドイツ）の間で条約が締結され、1940年のオイベン＝マルメディ地域のドイツ併合が国際法上無効であることが強調された。加えて、国境線の修正、文化協定、補償金の支払いにおいて両国の合意がなされた。さらに、欧州統合のプロセスも、両国の関係正常化に貢献することになった<sup>28)</sup>。かつての敵国間に生まれた緊張緩和の雰囲気は、ベルギーのドイツ語系住民にとって有利に働き、彼らに言語的・文化的な権利を認めることに対する一般的な抵抗感も次第に薄れていった。

続く1960年代は、3節で見たように、フランデレンとワロンの言語対立の激化に伴ってベルギーの地方分権化が大きく進んだ時代である。オランダ語とフランス語の言語境界線の確定（1962-63年）が契機となり、憲法改正によって国内が4つの言語圏に区分されると、オランダ語圏、フランス語圏、二言語併用圏（ブリュッセル）と並んでドイツ語圏も承認された。1973年にはドイツ語文化共同体（Deutsche Kulturgemeinschaft）が設立され<sup>29)</sup>、同年10月23日に初の審議会が行われた。その後、更なる憲法改正によって、文化共同体は共同体に移行し、権限が拡大され、政府が置かれることになった。ドイツ語共同

---

27) Parlament der Deutschsprachigen Gemeinschaft (2014: 24-25) 参照。

28) 1957年3月には、ローマ条約（欧州経済共同体と欧州原子力共同体の設立）がベルギーと西ドイツを含む6か国によって調印されている。

29) 東ベルギー地方のマルメディとヴァイスメスにはドイツ語話者も一部住んでいたが、以前からフランス語話者が多数を占めていたため、フランス語文化共同体に含められた。

体は1984年1月30日に正式に発足した。これは、ドイツ語共同体審議会によって初のドイツ語共同体政府が選出された日に当たる。

以上のように、ドイツ語共同体の設立には、戦後のベルギーとドイツの関係改善と、フランデレンとワロンの言語対立の二軸が影響している。ドイツ語共同体はこの言語抗争の副産物であったとも言えるが、ベルギーが単一国家から連邦制国家へと移行するうえでの当然の論理的帰結でもあった<sup>30)</sup>。フランデレンとワロンの言語抗争はたびたびベルギーの政治的結束を脅かし、国家の再編成にまで導いたわけであるが、この問題を解決するためには、現在のような言語圏に基づく自治のモデルが必要不可欠であったと考えられる。

#### 4.4. ドイツ語共同体の機関

ドイツ語共同体は、議会 (Parlament)、政府 (Regierung)、庁 (Ministerium) の3つの機関を持っている。これらはすべてオイペンにある。以下、順に紹介する。

##### 4.4.1. 議会

オイペンの街は地形上山の手 (Oberstadt) と下町 (Unterstadt) に分かれる。現在のドイツ語共同体議会は、下町の丘の上にある。その建物は1915年に商人の保養施設として作られ、その後長い間肺病患者のサナトリウムとして使われてきたものである<sup>31)</sup>。大規模な改修を経て、2013年10月より共同体議会として使用されている。

2017年8月にオイペンを訪問した際、白壁が美しいこの建物の外には、4本の旗が翻っていた。EU旗、ベルギー国旗、ドイツ語共同体旗、オイペン旗である。地下1階の本会議場は、前面がガラス張りとなっており、室内から庭の

---

30) Das Bürgerinformationsportal der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens „Die institutionelle Entwicklung“ [http://www.ostbelgienlive.be/desktopdefault.aspx/tabid-1054/1533\\_read-45664/](http://www.ostbelgienlive.be/desktopdefault.aspx/tabid-1054/1533_read-45664/) (最終閲覧日: 2017年8月25日) 参照。

31) Parlament der Deutschsprachigen Gemeinschaft (2015a) 参照。

緑がよく見える。本会議場の床、壁、机はすべて光沢のあるタイル状の木材で統一されている。共同体議会の職員の説明によると、このデザインは森林に富むドイツ語共同体を象徴しているという。



写真1 (左) 共同体議会外観 写真2 (右) 本会議場内部 (撮影：2017年8月17日)

ドイツ語共同体議会は、5年に1度、直接選挙によって25人の議員を選出している。前回の選挙は2014年5月25日に行われ、現在は2014年から19年までの任期期間である。議員の中からは4名の大臣 (Minister) が選出され、ドイツ語共同体政府を構成する。現在の首相は ProDG 党のオリヴァー・パーシュで、1999年より首相を務めてきた社会党のカール＝ハインツ・ランベルツに代わり2014年に就任した。首相を含む4名の大臣は、それぞれ地区行政担当相、文化・雇用・観光担当相、家庭・健康・社会問題担当相、教育・学術研究担当相となっている。

#### 4.4.2. 政府と庁

ドイツ語共同体政府は、オイペンの山の手にある。赤煉瓦色の重厚な建物は、Haus Grand Ry と呼ばれる歴史的建造物である。1761-63年に織物工場主の邸宅として建設され、その後、1893-1978年には郵便局としても使用されたため、Alte Postとも呼ばれる。1984年にドイツ語共同体が正式に発足してからは、政府の役割を担っている。

ドイツ語共同体政府の向かい側には、ドイツ語共同体庁がある。庁が設立さ

れたのは、1984年のドイツ語共同体発足後すぐのことである。庁は行政機関として政府の管轄下に置かれ、政府の政治的決定を実行に移している。2017年現在、249人が日々の庁の業務に従事している<sup>32)</sup>。



写真3 (左) 共同体政府 写真4 (右) 共同体庁入口看板 (撮影：2017年8月16日)

ところで、写真4からも見て取れるように、ドイツ語共同体政府は Ostbelgien というロゴマークを今後積極的に使用する方針である。東ベルギー地方を意味するこの名称は、その地理的特性を外部にアピールしやすく、事業主や観光客の誘致につながるという狙いがあるようだ<sup>33)</sup>。また、これまでロゴマークとして使用されてきた DG (ドイツ語共同体の略称) が何を指すのかが分かりにくいという問題も、これによって解決できるという<sup>34)</sup>。この方針転換は2017年3月15日になされたばかりだが、すでにドイツ語共同体庁の外装にも新しいロゴマークが取り入れられていた。

32) Das Bürgerinformationsportal der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens „Das Ministerium der Deutschsprachigen Gemeinschaft“ [http://www.ostbelgienlive.be/desktopdefault.aspx/tabid-219/753\\_read-968/](http://www.ostbelgienlive.be/desktopdefault.aspx/tabid-219/753_read-968/) (最終閲覧日：2017年8月31日) 参照。

33) Das Bürgerinformationsportal der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens „Die Deutschsprachige Gemeinschaft in Belgien“ [http://www.ostbelgienlive.be/desktopdefault.aspx/tabid-84/186\\_read-448/](http://www.ostbelgienlive.be/desktopdefault.aspx/tabid-84/186_read-448/) (最終閲覧日：2017年8月31日) 参照。

34) BRF Nachrichten „Standortmarke Ostbelgien ist lanciert“ <https://brf.be/regional/1071196/> (最終閲覧日：2017年8月31日) 参照。

## 5. ドイツ語共同体の言語状況

ベルギーのドイツ語共同体ではドイツ語が公用語とされていると繰り返し述べてきたが、それは具体的には、議会、裁判所、学校教育におけるドイツ語の使用が憲法によって定められているということである。とはいえ、ドイツ語共同体の首府オイペンを訪れたところ、やはりドイツ語を生活の核としながらも、ドイツ国内とは異なる言語状況が存在すると感じた。本節では、この点を明らかにするために、ドイツ語共同体の方言分布、代表的なメディア、教育制度を順に取り上げる。

### 5.1. ドイツ語共同体の方言分布

私たちは日常的に、言語使用の場面に応じて、同一言語内の様々な変種 (Varietät) を選択している。その代表例は、標準変種 (標準語) や地域変種 (地域的日常語や方言) である。ドイツ語共同体に関して言えば、住民は行政、学校教育、教会など、社会的場面の大部分において標準ドイツ語を使用しているが、社交的場面において地域のドイツ語方言が果たしている役割も依然として大きい<sup>35)</sup>。



写真5 オイペンの街並

(撮影：2017年8月16日)

さて、1節でも触れたように、ドイツ語共同体内の諸方言はライン扇状地域の西端に位置付けられる (図4参照)。この地域には、複数の等語線 (Isoglos-

35) Parlament der Deutschsprachigen Gemeinschaft „Ostbelgien: souverän grenz-erfahren“ [http://www.pdg.be/desktopdefault.aspx/tabid-3982/7162\\_read-41444](http://www.pdg.be/desktopdefault.aspx/tabid-3982/7162_read-41444) (最終閲覧日：2017年9月10日) 参照。



se) が集中している。具体的には、次のような等語線が存在する。

1. ユルディング線 (ik と ich の境界線)
2. ベンラート線 (maken と machen の境界線)
3. アイフェル線 (Dorp と Dorf の境界線)
4. フンスリュック線 (dat と das の境界線)
5. ゲルマースハイム線 (Appel と Apfel の境界線)

このうち、ベンラート線は第二次子音推移の波及の北限とみなされており、この線上でドイツ語の諸方言は北の低地ドイツ語 (Niederdeutsch) と南の高地ドイツ語 (Hochdeutsch) に大別される。ライン扇状地域のより詳しい方言分布については、1. ユルディング線から 2. ベンラート線の間が南低地フランケン語 (Südniederfränkisch)、2. ベンラート線から 3. アイフェル線の間がリプアーリ語 (Ripuarisch)、3. アイフェル線から 4. フンスリュック線の間がモーゼルフランケン語 (Moselfränkisch)、4. フンスリュック線から 5. ゲルマースハイム線の間がラインフランケン語 (Rheinfränkisch) となる<sup>36)</sup>。



図4 ライン扇状地域

出典：荻野 / 齋藤 (2005: 243)

36) LVR-Institut für Landeskunde und Regionalgeschichte „Rheinischer Fächer“ [http://www.rheinische-landeskunde.lvr.de/de/sprache/sprachatlas/dialektkarten/rheinischer\\_faecher/rheinischer\\_faecher\\_1/detailseite\\_159.html](http://www.rheinische-landeskunde.lvr.de/de/sprache/sprachatlas/dialektkarten/rheinischer_faecher/rheinischer_faecher_1/detailseite_159.html) (最終閲覧日：

図5はリエージュ大学の Robert Möller 教授によって作成された方言地図である。この図からわかるように、ドイツ語共同体内の諸方言はおおよそ3つのグループに分類される。1つ目は南低地フランケン語で、ドイツ語共同体北部のケルミス、ロンツェン、オイベンで話されている。リンブルフ地方（ベルギーのリンブルフ州とオランダのリンブルフ州）で用いられるリンブルフ語（Limburgisch）も同じグループに属すると言われる<sup>37)</sup>。2つ目はリプアーリ語で、ラーレン、ビュトゲンバッハ、ビュリンゲンとアメルの一部で話されている<sup>38)</sup>。ドイツのケルン語（Kölsch）やアーヘン語（Öcher

Platt）もこのグループに属する。3つ目はモーゼルフランケン語で、ドイツ語共同体南部のザンクト・フィートとブルク・ロイラントで話されている。この地域はルクセンブルクに隣接するが、その公用語であるレッツェブルク語（Letzeburgisch）も起源上はモーゼルフランケン語のひとつである。

以上の分類からもわかるように、ドイツ語共同体は北のケルミスから南のブルク・ロイラントに至るまで、それぞれ独自の方言を有しており、使われる語

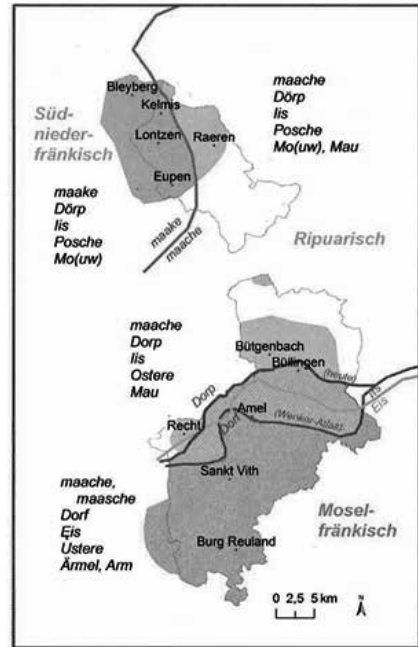


図5 ドイツ語共同体の諸方言

出典：Parlament der DG (2014: 21)

2017年9月10日）参照。

37) Parlament der Deutschsprachigen Gemeinschaft (2014: 20) 参照。

38) 図5において、DorpとDorfを分けるアイフェル線と並行して走っているIisとEisの境界線は、初期新高ドイツ語期の二重母音化（Frühneuhochdeutsche Diphthongierung）を表している。すなわち、長母音のîから二重母音のeiへの変化である。

彙にも地域による違いが見られる<sup>39)</sup>。例えば、Robert Möller 教授らの調査によれば<sup>40)</sup>、図 5 にも示されているように、「復活祭」を表す標準ドイツ語の Ostern は、ドイツ語共同体の北部で Posche<sup>41)</sup>、中部で Ostere や Owstere、南部で Ustere や Uøstere と呼ばれる。また、「袖」を表す標準ドイツ語の Ärmel は、北部で Mo や Mouw<sup>42)</sup>、中部で Mau、南部で Ärmel、Ärəm、Arəm などと呼ばれる。このような方言の多様性が、ドイツ語共同体のひとつの特色であると言いうことができるだろう。

## 5.2. ドイツ語共同体の代表的メディア

4 節でも言及したように、ドイツ語共同体には、BRF というドイツ語による公共放送局がある。そもそもベルギー国内においてドイツ語ラジオ放送が始まったのは 1945 年 10 月 1 日であり、すでに 70 年を超える歴史があるが、当初はブリュッセルの放送局から 20 分程度のドイツ語ニュースが流れるだけであった。独立した放送局として BRF が設立されたのは 1977 年であり、1979 年に拠点がブリュッセルからオイペンに移された<sup>43)</sup>。現在、BRF はオイペンの

39) ドイツ語共同体の公共放送局 BRF は、アイフェル、オイペン、ケルミス、ラーレン方言による放送をインターネット上に公開している (<https://2.brf.be/sendungen/mundart>)。また、ドイツ語共同体のウェブサイトでは、各地の方言による物語の朗読を聞くことができる (<http://www.ostbelgienkulturerbe.be/desktopdefault.aspx/tabid-4203>)。

40) Das Kulturportal der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens „Dialektatlas der Deutschsprachigen Gemeinschaft“ <http://www.ostbelgienkulturerbe.be/desktopdefault.aspx/tabid-3551/?catid=30/catid-108> (最終閲覧日: 2017 年 9 月 15 日) 参照。上記のサイトにおいて、Ostern と Ärmel を含む 69 語の方言地図が確認できる。

41) 上記の辞典によれば、Posche はギリシア語・ラテン語の pascha から派生した単語であり、キリスト教の復活祭がユダヤ教の過ぎ越しの祭 (Pascha-Fest) を起源とすることを示唆しているという。

42) 上記の辞典によれば、Mo、Mouw、Mau はオランダ語・低地ドイツ語系の単語である。中高ドイツ語の騎士道物語には mouwe (袖) という語が時折現れるが、これは、フランスの騎士文化を受容した際にこの地域が仲介の役割を果たしたことの現れであるという。

43) BRF Unternehmen „BRF-Geschichte“ <https://u.brf.be/profil/geschichte> (最終閲覧日: 2017 年 9 月 4 日) 参照。

ドイツ語共同体議会の隣に本社を構え、ザンクト・フィートとブリュッセルにもスタジオを持ち、3つのラジオ放送チャンネル（BRF1、BRF2、BRF-DLF）と1つのテレビ放送チャンネル（BRF-Fernsehen）を通じて、ベルギー国内外およびドイツ語共同体の日々の出来事



写真6 オイベンのBRF

（撮影：2017年8月17日）

をドイツ語で伝えている。ラジオ放送チャンネル BR-DLF は、ケルンを本拠地とする放送局 Deutschlandfunk と共同でプログラムを制作している。テレビ放送チャンネル BRF-Fernsehen では、Blickpunkt という 15 分ほどのニュース番組が毎日放送されている。この番組は、BRF のインターネットサイト (<https://brf.be>) でも視聴可能である。

もうひとつ、この地域のメディアとして忘れてはならないのは、Grenz-Echo である。「国境のこだま」を意味する GrenzEcho は、2017 年に創刊 90 周年を迎えたベルギーで唯一のドイツ語日刊紙である<sup>44)</sup>。本社はオイペンにある。第一次世界大戦後の 1920 年、東ベルギー地方（オイペン＝マルメディ地域）がベルギー領となったとき、この地域には全部で 5 つのドイツ語紙が存在していたが<sup>45)</sup>、これらは全て多かれ少なかれ親ドイツ的、反ベルギー的な立場をとっていた。東ベルギー地方の帰属をめぐる住民投票の実施を求めたのも、これらの新聞であった。そこで、当時この地域を統治していたオイペン＝マルメディ政府のバルティア将軍がドイツ語による親ベルギー的な機関紙の創刊を指示し、1927 年 6 月に GrenzEcho が発行された。初めは週 1 回の刊行であつ

44) BRF Nachrichten „Runder Geburtstag: 90 Jahre GrenzEcho“ <https://brf.be/kultur/medien/1111963>（最終閲覧日：2017年9月4日）参照。

45) Eupener Zeitung, Die Arbeit, Der Landbote, Die Malmedy-St.Vithener Volkszeitung, Eupener Nachrichten の 5 紙である。詳しくは、Grenz-Echo „Historie“ <http://www.grenzecho.net/unternehmen/historie>（最終閲覧日：2017年9月4日）を参照。

たが、1928年に週2回となり、1932年には日刊となった。その親ベルギー的、反ナチ的な立場ゆえ、1933年にはドイツ国内での GrenzEcho の発行が禁止された。1940年5月10日にドイツ軍がベルギーに侵攻すると、この新聞の発行は全面的に中止となった。編集長の Henri Michel はブリュッセルに退避するものの拘束され、ザクセンハウゼン強制収容所に送られた。第二次世界大戦後の1945年3月24日、GrenzEcho は発行を再開し、収容所から解放された編集長は、同年5月21日に職務に復帰した。戦後の時代において、ドイツ軍に徴集され世界中に拡散した無数の東ベルギー人の調査と帰還の問題、ベルギー政府による粛清の措置の問題、国内で少数派となるドイツ語系住民の言語的権利の問題など、多くの複雑な問題に直面しながら、GrenzEcho は一貫して東ベルギー地方のドイツ語の保持に努めてきた。購読層は次第に共同体南部にも拡大し、現在15,000部を発行している<sup>46)</sup>。ところで、GrenzEcho は、日刊紙と並び書籍の出版も行っている。また、インターネットのポータルサイト (<http://www.grenzecho.net>) を通じて、日々のニュースを配信している。

### 5.3. ドイツ語共同体の教育制度

ゲルマン文化とラテン文化の交点に位置するドイツ語共同体の人々は、ドイツ語を公用語としているとはいえ、決してドイツ語のみを用いて生活しているわけではない。「東ベルギーの人々はプロイセン的な労働をし、フランス的な生活を送っている」(Ostbelgier arbeiten preußisch und leben französisch) と言われるように<sup>47)</sup>、ドイツ語共同体の住民の多くがドイツ語とフランス語の二言語話者である。

4節でも述べたとおり、ドイツ語共同体の住民の約2割は外国籍である。また、日々の通勤通学においても、共同体内外に多くの流動がある。2013年の

---

46) GrenzEcho „GrenzEcho-Tageszeitung“ <http://www.grenzecho.net/unternehmen/produkte/tageszeitung> (最終閲覧日：2017年9月4日) 参照。

47) DG.be „Die Deutschsprachige Gemeinschaft“ [http://www.dg.be/desktopdefault.aspx/tabid-2788/5431\\_read-34851](http://www.dg.be/desktopdefault.aspx/tabid-2788/5431_read-34851) (最終閲覧日：2017年9月4日) 参照。

ドイツ語共同体内の調査によれば<sup>48)</sup>、共同体内への通勤通学者として、ワロン地域（フランス語共同体）から 5,008 人、ドイツから 517 人、フランデレン地域から 392 人、ブリュッセルから 45 人が数えられる。逆に、ドイツ語共同体外への通勤通学者は、ドイツへ 6,107 人、ワロン地域（フランス語共同体）へ 3,176 人、ルクセンブルクへ 3,497 人、フランデレン地域へ 394 人、ブリュッセルへ 320 人となっている。すなわち、ドイツ語共同体の住民の多くは日常的に多言語を使用する環境にあるとすることができる。

このように複雑な言語状況に対応するために、ドイツ語共同体は多言語主義を推進し、ドイツ語とフランス語の二言語教育を早期から行っている<sup>49)</sup>。とりわけ注目に値するのは幼稚園である。他の多くのヨーロッパ諸国とは異なり、ベルギーでは幼稚園が教育制度の一部となっており、すべての子供が無償で幼稚園に在籍する権利を持つ。入園が許可されるのは、3 歳以上の（または、その年の 12 月 31 日までに 3 歳になる）子供である。統計では 3 歳の子供の 98% が継続的に通園しているという<sup>50)</sup>。つまり、共同体内のほぼすべての子供が平均で 3 年間の幼稚園教育を受けていることになる。小学校（Primarschule）では教育言語としてのドイツ語と第一外国語としてのフランス語を学ぶことになるが<sup>51)</sup>、すでに幼稚園の段階で、小学校のフランス語教育の準備が始まっている。すなわち、3 歳からフランス語のアクティビティが最低で週 50 分、最高で 200 分提供されるのである。小学校では、フランス語の授業が 1、2 学年で

---

48) DGStat, Ministerium der DG (2014) 参照。

49) 2 節で見たとおり、ベルギーの教育は各共同体が所管している。ドイツ語共同体だけでなく、フランス語共同体とオランダ語共同体においても、小学校の 6 年間と中等学校の 6 年間、計 12 年間は義務教育となる。西尾 / 金田 (2010: 26) 参照。

50) Das Bildungsportal der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens „Die Schulebenen im Unterrichtswesen in der DG“ [http://www.ostbelgienbildung.be/desktopdefault.aspx/tabid-2189/4268\\_read-31599](http://www.ostbelgienbildung.be/desktopdefault.aspx/tabid-2189/4268_read-31599)（最終閲覧日：2017 年 9 月 4 日）参照。

51) 憲法の規定に従い、ドイツ語共同体では、少数のフランス語話者保護のために作られた学校を除き、すべての初等教育機関でドイツ語が教育言語、フランス語が第一外国語とされている。Ministerium der Deutschsprachigen Gemeinschaft (2008: 31-32) 参照。

週 2～3 時間、3、4 学年で週 3～4 時間、5、6 学年で週 5～6 時間行われる<sup>52)</sup>。さらに、12 歳以降の中等学校 (Sekundarschule) では、フランス語を教育言語として選択することも可能となる。また、第一外国語としてのフランス語と並んで第二外国語としての英語を学び、卒業までの 6 年間でヨーロッパ言語共通参照枠の B2 レベルに達することを目標としている。

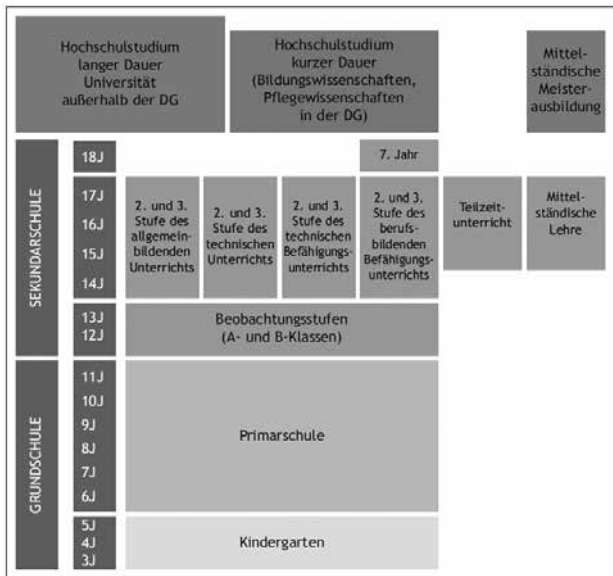


表 2 ドイツ語共同体の教育課程<sup>53)</sup>

ドイツ語共同体での中等教育修了後に高等教育機関に進学する場合、可能性がふたつある。ひとつは、2005 年にオイベンに設立された Autonome Hochschule in der Deutschsprachigen Gemeinschaft (AHS) に進学することである。この単科大学には、看護学、小学校教員養成、幼稚園教員養成の学士課程

52) Ministerium der Deutschsprachigen Gemeinschaft (2008: 32) 参照。

53) Ministerium der Deutschsprachigen Gemeinschaft (2008: 23) より引用。

があり、2016-17年度には251人の学生が在籍している<sup>54)</sup>。もうひとつの選択肢は、ドイツ語共同体外の高等教育機関に進学することである。進学先として選ばれることが多いのは、リエージュ大学（ベルギー、ワロン地域）やアーヘン工科大学（ドイツ）である。ドイツ語共同体庁のアンケート調査によると、アビトゥア合格者のおよそ30%が国外の大学への進学を選び、その多くがドイツであるという（表3参照）。ただし、最近の傾向として、オランダのマーストリヒト大学が選ばれることが増えてきている<sup>55)</sup>。

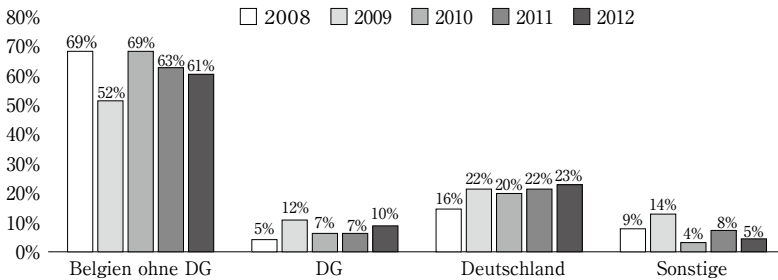


表3 大学進学先 (Parlament der DG 2014: 13に基づき作成)

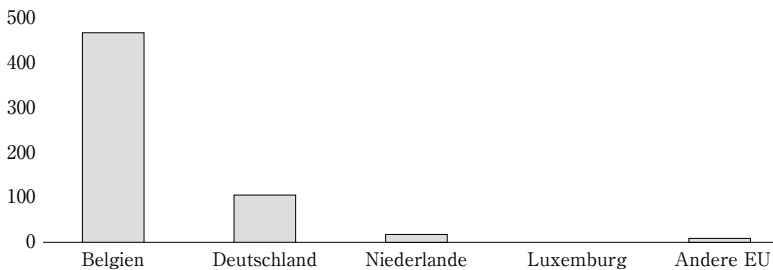


表4 大学助成金の申請, 2012-13年度 (Parlament der DG 2014: 13に基づき作成)

54) Autonome Hochschule der Deutschsprachigen Gemeinschaft (2017: 4) 参照。

55) Parlament der Deutschsprachigen Gemeinschaft (2014: 13) 参照。



さらに、ドイツ語共同体からの大学進学者の助成金申請を大学所在地ごとに分類すると、2012-13年度の610件の申請のうち、108件がドイツ（うち72件がアーヘン）、20件がオランダ（うち16件がマーストリヒト）、11件がEUのその他の国々であったという（表4参照）。このデータからも、ドイツ語共同体において国境を越えた大学進学の可能性が開かれていることが確認できるだろう。

## 6. おわりに

ベルギーにおけるドイツ語系住民は、確かに数の上では圧倒的なマイノリティであり、ドイツ語圏研究の枠組みにおいても、ドイツ語共同体はこれまで国境地帯の特殊な一例といった扱いを受けることが多かったように思われる。しかし、本稿で述べてきたように、ドイツ語共同体がドイツ語を自らのアイデンティティとしながらも、ワロン地域のフランス語共同体およびドイツ、オランダ、ルクセンブルクに接する地理的条件を生かし、多言語主義・多文化主義を推進していることは、十分に注目に値すると言えるだろう。1984年のドイツ語共同体発足、1993年の連邦制移行と、比較的最近になって成立した体制であるが、ドイツ語共同体が言語と文化に関してどのような政策を実行していくのか、そして周辺地域とどのように連携していくのかを、これからも注視していきたい。本稿は、ドイツ語共同体設立の背景となる情報をまとめることが中心となり、その言語状況について詳細に論じることができなかったが、今後の課題として引き続き取り組み、ドイツ語圏の実態に少しでも近づきたいと考えている。

### 参考文献

- Autonome Hochschule der Deutschsprachigen Gemeinschaft (2017) *AHS in Zahlen 2017*. Eupen. [http://www.ahs-dg.be/PortalData/13/Resources//2017-05-16\\_-\\_AHS\\_in\\_Zahlen\\_2017.pdf](http://www.ahs-dg.be/PortalData/13/Resources//2017-05-16_-_AHS_in_Zahlen_2017.pdf)
- Cornelissen, Georg (2015) *Kleine Sprachgeschichte von Nordrhein-Westfalen*. Köln: Greven Verlag.

- DGStat, Ministerium der DG (2014) *Die DG in Zahlen. Ausgabe 2014 / 2015*. Eupen. [http://www.ostbelgienstatistik.be/PortalData/22/Resources/downloads/DGStat\\_Flyer\\_RZ\\_DEF.pdf](http://www.ostbelgienstatistik.be/PortalData/22/Resources/downloads/DGStat_Flyer_RZ_DEF.pdf)
- Dröge, Philip (2017) *Niemands Land. Die unglaubliche Geschichte von MORESNET, einem Ort, den es eigentlich gar nicht geben durfte*. München / Berlin: Piper Verlag.
- König, Werner / Elspaß, Stephan / Möller, Robert (2015<sup>18</sup>) *dtv-Atlas Deutsche Sprache*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag.
- Minderjahn, Rolf (2014) *Eupen. Unterwegs in der Hauptstadt des deutschsprachigen Belgiens*. Eupen: Grenz-Echo Verlag.
- Ministerium der Deutschsprachigen Gemeinschaft (2008) *Unterricht und Ausbildung in der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens. Schriftenreihe des Ministeriums der DG. Band 3*. Eupen. [http://www.ostbelgienbildung.be/PortalData/21/Resources/downloads/home/publikationen/WEB\\_Band3-2Auflage.pdf](http://www.ostbelgienbildung.be/PortalData/21/Resources/downloads/home/publikationen/WEB_Band3-2Auflage.pdf)
- Parlament der Deutschsprachigen Gemeinschaft (2014) *Das Parlament der DG. Das Haus des Bürgers*. Eupen.
- Parlament der Deutschsprachigen Gemeinschaft (2015a) *Ein Haus als Spiegel seiner Zeit – Die Baugeschichte des DG-Parlaments*. Eupen. [http://www.pdg.be/PortalData/34/Resources/dokumente/broschueren/Ein\\_Haus\\_als\\_Spiegel\\_seiner\\_Zeit\\_Die\\_Baugeschichte\\_des\\_DG-Parlaments.pdf](http://www.pdg.be/PortalData/34/Resources/dokumente/broschueren/Ein_Haus_als_Spiegel_seiner_Zeit_Die_Baugeschichte_des_DG-Parlaments.pdf)
- Parlament der Deutschsprachigen Gemeinschaft (2015b) „*Small is beautiful*“ – *Aktuelle Entwicklungen in der europäischen Minderheiten-, Kleingliedstaaten- und Grenzregionenforschung. Schriftenreihe der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens. Band 1*. Eupen. [http://www.pdg.be/PortalData/34/Resources/dokumente/broschueren/Schriftenreihe\\_PDG\\_Band\\_1.pdf](http://www.pdg.be/PortalData/34/Resources/dokumente/broschueren/Schriftenreihe_PDG_Band_1.pdf)
- Parlament der Deutschsprachigen Gemeinschaft (2016a) *Die Deutschsprachige Gemeinschaft und ihr Parlament*. Eupen. [http://www.pdg.be/PortalData/34/Resources/dokumente/broschueren/Broschuere\\_DG\\_DE\\_Neu\\_2016.pdf](http://www.pdg.be/PortalData/34/Resources/dokumente/broschueren/Broschuere_DG_DE_Neu_2016.pdf)
- Parlament der Deutschsprachigen Gemeinschaft (2016b) *Welcher Platz für die Deutschsprachige Gemeinschaft im föderalen Belgien? Schriftenreihe der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens. Band 2*. Eupen. [http://www.pdg.be/PortalData/34/Resources/dokumente/schriftenreihe/SR\\_Neu\\_2016\\_2.pdf](http://www.pdg.be/PortalData/34/Resources/dokumente/schriftenreihe/SR_Neu_2016_2.pdf)
- Rat für Entwicklungszusammenarbeit, Solidarität und Integration (2014) *Migration und Integration in der Deutschsprachigen Gemeinschaft. Vorschlag für ein Konzept*. Eupen. <http://www.resi.be/cms/files/ig-druckfassung.pdf>
- Wintgens, Leo (2017) *Sprachatlas des Karolingisch-Fränkischen II – „Wi zaach éch dat op Ostbäljesch Plat?“ Lantlebre, Formenlebre, Namenkunde, Sprachgeschichte, Wortschatz*. Aachen: Helios Verlag.
- Zweig, Stefan (2016<sup>19</sup>) *Die Welt von Gestern. Erinnerung eines Europäers*. Frankfurt am Main: Fischer Taschenbuch Verlag.
- 岩本和子 / 石部尚登 (編) (2013) 『「ベルギー」とは何か? — アイデンティティの多層性 —』京都: 松籟社.
- 小川秀樹 (編著) (2009) 『ベルギーを知るための52章』東京: 明石書店.
- 荻野蔵平 / 齋藤治之 (編著) (2005) 『ドイツ語史小辞典』東京: 同学社.

- 河崎靖 / クレインス フレデリック (2002) 『低地諸国 (オランダ・ベルギー) の言語事情 — ゲルマンとラテンの間で —』 東京: 大学書林.
- 西尾由利子 / 金田尚子 (2010) 「ベルギー — 3 公用語、言語戦争の国 —」 In: 大谷泰照 (編) 『EU の言語教育政策 日本の外国語教育への示唆』 25-38. 東京: くろしお出版.
- 松尾秀哉 (2015) 『連邦国家ベルギー 繰り返される分裂危機』 東京: 吉田書店.

#### 参考ウェブサイト

- BRF Unternehmen <https://u.brf.be> (最終閲覧日: 2017 年 9 月 4 日)
- BRF Nachrichten <https://brf.be> (最終閲覧日: 2017 年 9 月 4 日)
- Das Bildungsportal der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens  
<http://www.ostbelgienbildung.be> (最終閲覧日: 2017 年 9 月 4 日)
- Das Bürgerinformationsportal der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens  
<http://www.ostbelgienlive.be> (最終閲覧日: 2017 年 8 月 31 日)
- Das Kulturerbeportal der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens  
<http://www.ostbelgienkulturerbe.be> (最終閲覧日: 2017 年 9 月 15 日)
- Das Statistikportal der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens  
<http://www.ostbelgienstatistik.be> (最終閲覧日: 2017 年 8 月 18 日)
- DG.be <http://www.dg.be> (最終閲覧日: 2017 年 9 月 4 日)
- GrenzEcho <http://www.grenzecho.net> (最終閲覧日: 2017 年 9 月 4 日)
- LVR-Institut für Landeskunde und Regionalgeschichte  
<http://www.rheinische-landeskunde.lvr.de> (最終閲覧日: 2017 年 9 月 10 日)
- Parlament der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens  
<http://www.pdg.be> (最終閲覧日: 2017 年 9 月 10 日)